

# 同窓生の広場



## 道徳の見える化

野原 晃

○ ほとんど機能していないと言われている道徳の授業。私はそう思っています。教科化というなら、思い切って「道徳」を「見える科」とでもしましょうか。そんなことを考えていた頃、こんな素敵な詩に出会いました。

「確かに〈ここ〉はだれにも見えない／けれど〈ここ〉は人に見えない／けれど〈ここ〉は人に対する積極的な行為だから／同じように胸の中の〈思い〉は見えない／けれど〈思いやり〉はだれにでも見える／それも人に対する積極的な行為なのだから／あたたかいところがあたたかい行為となり、やさしい思いがやさしい行為になるとき、〈心〉も〈思い〉も初めて美しく生きる／それは人が人として生きることだ」

(宮澤章二「行為の意味」)  
授業中ではもとより、教育活動全般、生活の中においても「道徳的実践」が「積極的な行為」として習慣化し、市民の方々にも「見える」ようになれば最高です。

(埼玉県道徳教育推進協議会  
会長・野原晃・教育さいたま  
ガジン・平成二十九年二月)

○ 皆さん、こんにちは。教育長の野原晃でございます。

本日は、江南北小学校の道徳委嘱研究が、このように盛大に、発表の運びとなったことに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、ずいぶん以前、昭和五十四年の暮れのことでございます。県の基準教育課程、現在の編成要領の改訂協力委員会道徳部会の打ち上げに、大宮駅西口の、通称どぶ板通りを訪ねた時のことです。当時三十二歳の私は、道徳部会の末席を汚していましたので、県の指導課の道徳担当のK先生と最後尾を歩いていました。会場となるお店の手前のところで、ヘビースモーカーのK先生は、火のついてるタバコを「水たまり」に、ポンと捨て、

「これが、道徳なんだよなあ、野原さん」とおっしゃいました。まさしく、私の道徳の原点はここにあったのです。

本日受付でお渡しした、「道徳の見える化」も、わが熊谷市のリーフレット『道徳の見える化』も、江南北小学校の研究発表も根っこ部分は同じでございます。

(令和六年十一月二十七日)  
(昭和四十五年卒)

## 往事茫茫ですが・・・

大塚 基司

私は、昭和四十六年三月に小学校課程社会科専修を卒業後、小学校教員として採用され、教育委員会勤務なども経て、東松山市立松山第一小学校で定年を迎えました。現在は、所有地の保全管理(除草作業です)や稽古事(琵琶弹奏)、読書などで日を過ごしています。

埼玉大学に入学した当時の学長は、気象学者として有名な和達清夫先生。ご温顔が今でも目に浮かびます。

部活動では、高校時代から続けてきた剣道部に入部しました。国体出場などの経験をもつ同期生たちとともに、稽古に励む日々でした。九州や関西の地に遠征合宿したことも思い出です。顧問の佐藤顕先生との稽古では、渾身の体当たりで微動だにしない巖のような巨躯と気迫にただただ圧倒されるばかりでした。稽古が終わると、大学の近くにお住まいの佐藤先生を私のオートバイの後部席に乗せてお送りすることがありました。先生の体重で、オートバイの前輪が浮き上がりそうになるのを必死に操作して運転したことも思い出です。剣道部の同期の仲間には、卒業後様々な場面で助言や支援をいただき感謝しています。

もう一つの思い出は社会科専修としての日々です。中学校課程の人たちが集う部屋に出入りし、学友の言動に啓発されていました。後年、県教育局に勤務して、第一回全国環境教育フェアの担当となつて四苦八苦していた時、相棒となつて助言・支援してくれたのも、専攻生の部屋での知己でした。

卒業論文は「ナチスドイツの東方政策」でした。資料収集も十分で未熟・不出来な論文を、指導教官の小貫徹先生は、「卒業後も研究を続けていきなさい」と励ましてくださいました。

卒業し教職に就いてしばらくして、埼玉県長期研修教員として、埼玉大学で菊池兵一先生に「算数科におけるわかる授業の展開」をテーマにご指導をいただいたことも思い出です。菊池先生の「算数教育学研究」などの講義は、現場で指導に悩んできた私にとって数多くの示唆に富んだ内容でした。

往事茫茫・・・あの頃のことを思い出すことは僅かになりましたが、良き師、良き友に恵まれた大学時代でありました。生涯の伴侶と知り合うことができたのもこの四年間でした。

(昭和四十六年卒)

## 戦後八十年 戦争体験を語り継ぐ

増田 正博

二〇二五年は戦後八十年の節目の年にあたり、平和を祈念する行事が全国各地で行われました。

九月二十七日には「第六回あの戦場体験を語り継ぐ集い」が十几年来に日本教育会館で開催され、平均年齢九十五歳以上の十四人が「語らずに死ねるか!」をテーマに壮絶な体験を伝えました。フィリピン・ミンダナオ島の密林に逃げ込んだ元日本兵の「まさに地獄絵図だった」という証言や、十三歳の時に東京大空襲で火の中を逃げ惑い、自身は生き延びたが母と五人の姉弟妹を失ったという女性の証言等を、体験者から直接聞く機会を持つことが出来ました。

また、八月二十三日には「第二十三回シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い」が国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で行われ、私は初めて参加しました。と言うのは、亡き父が約六十万人といわれるシベリア抑留者の一人であり、犠牲となった約六万人の方を追悼したいの思いからでした。

父は平成元年八月に亡くなりましたが、その二か月前から自らの歩みをカセットテープ十三巻に残していました。四年前に、私たち兄弟妹三夫婦が協力し、このテープの音声を元に『我が生涯 増田

正治回顧談』を刊行しましたが、その内容の多くを四年半に及ぶ抑留生活が占めています。

昭和二十年八月十五日、朝鮮平壤郊外で終戦。早速ソ連軍が来て武装解除。帰国できる日を待ちつつ北朝鮮の寒い冬を耐え、翌年五月によく乗船。日本に向かうと思った船は、ソ連領ポシエツト港に。その後シベリア鉄道で中央アジアの捕虜収容所へ移送。

収容所では一日三五〇グラムの黒パン一個とフスマにお湯を注いだ薄いスープだけで、道路や住宅建設・運河造成・石炭採掘などの強制労働に従事させられました。厚生労働省に申請して得たロシア連邦政府からの資料には、父が少なくとも七カ所の収容所を移動させられた年月日の記録があり、父の記憶の正しさが確かめられ、その足跡を辿ることが出来ました。

回顧談の編集を契機に、舞鶴引揚記念館を訪ねたり、種々の平和祈念講演会に参加したりして学びを深めてきました。そうした中、講演の依頼があり、多くの方に父の抑留体験を伝えることが出来ました。死期が迫る中、自らの体験をテープに残した父の想いに応えることが出来た、と感じています。今後も戦争の実像を学び語り継ぎ、平和への道を探る活動を続けていきたいと考えています。

(昭和四十八年卒)

## 感謝、多くの出会い等

細野 千尋

埼玉大学学生時代、体育会系運動部に所属していました。入部すると、次第に授業の合間をぬつてまでも、日々コートに行き練習をしていました。その部は関東学連にも登録しており、大学間等様々な試合がありました。出場できるようになると、技術面はともかく、メンタル面ではずいぶん鍛えられた気がします。特に、私大の最強選手?と試合をした時、全く相手の力に及ばなかったことは、貴重な体験・経験になりました。そして、この大学時代に運動をしていたことは、現在までの健康体の一助になっているのではと思う時があります。

卒業後は教職の道に進み、一教諭一担任として子供たちと楽しくも奮闘していた日々。また、教職人生を振り返れば、新任校から転勤した学校等で多くの諸先輩の皆様との出会いがあり、若き学生時代の漠然とした「働く」ということ」の想像外の現在に至っています。勧められるままに教頭選考挑戦者となったことは、広く教育・学校教育に対する新たな学びの始まりとなり、改めて自分自身のその後の教職人生に対する意識変革になりました。教諭から教頭職一

年を経た後は、市や県の教育行政職に携わらせていただくこととなり、校長経験後も再び教育行政職、定年時は校長で終えました。

定年後も市教委と大学講師勤務を続け、大学を十年で満了後は、市教委勤務のみ現在も続いています。このような中、現職中からOGとの教育関係団体に所属、種々の役員をさせていただきましたが、定年後も役員が続き、本年令和七年度からは、全国教育女性連盟(現職・OG会員で組織、埼玉教育女性人間野会の上部団体)の会長を拝命しまして、週三日勤務と共に会長職に携わっております。

長年教育職を学校や教育行政で経験させていただいたことは、教育関係団体の役員、長をさせていただく上で非常に大きな体験・経験であったと感じる日々です。それは、多くの人たちとの出会いが、自分を支え育てていただいたことに他なりません。少子高齢化の昨今、コロナ禍を経る中、所属団体の会員減という大きな課題等に直面していますが、このような中であるからこそ、様々な人とのつながり、次代につなげていくとは、と考える日々です。

現在まで健康でいられること、多くの人たちとの出会いや学び、協働の機会等に感謝しております。

(昭和五十一年卒)



## 俳句への途(みち)

山崎 和恵

元音楽教員、退職後の教育・教養は、地元川口のまちにあったのです。すてきな先生方との出会いにより、新たなチャレンジが始まりました。ときどきの思いを俳句で綴らせていただきました。

一年目。なぜか無性にお伊勢参りがしたくなりました。

◆伊勢講のお札百年梅一輪

二年目。ハタヨガとの出会い。

◆号札の聞こゆる先に若楓

三年目。父逝去。義母(九十五歳)の施設への入所。

◆不器用な父の口ぐせ菊根分

四年目。まちゼミからマンツーマンでの着付けのお稽古四年間。

◆譲られし単衣の生絹梳る

七福神の寺で、月輪観・阿字観を修する瞑想のひとつとき。

◆十二月八日幾度瞑想朝日享く

◆色のなき風の中なる写経かな

五年目。四国お遍路第一回。

◆秋うらら行くも帰るも九十九折

六年目。四国お遍路第二・三回。

◆まことの眼拝す小春の大師さま

七年目。四国お遍路。結願。

◆ほら貝の満願成就紫木蓮

八・九年目。コロナ禍、夫の主宰する俳句雑誌「紫」の手伝いを通し、夫婦二人三脚の始まり。

◆新玉のお砂踏みめく画廊かな  
十年目。俳句が楽しくなり、夫

の勧めもあり、俳号・東目と恵。

◆春眠をチャボに起こされスト  
レッチ

十一年目。孫娘の成人式に親子三代で着物を着ての記念写真。

◆着付けする母から子へと花八手  
NHK俳句、第九回龍太賞で、  
第一次選考通過の喜び。

「二振りの力」十五句作品抄

◆二月果つ奥出雲より玉鋼

◆一振りの千年のとき早星

◆見極める研師の素手や夏館

◆刀身の柄巻のひも大西日

◆踏鞴踏み極めし地鉄月天心

十二年目。ご詠歌のお稽古を始め、初めての検定に合格。

◆夏座敷静寂広げる鈴の音

◆最上三十三観音巡礼。結願。

◆はだれ雪ぐるりと回る月の山

◆川前の山藤揺らす最上川

◆河鹿鳴く義経何処なりしかな  
退職十三年目。ご詠歌のお稽古

も丸二年となり、二回目の検定で  
十月十日に無事合格できました。

◆ときどきを振り返ると、ヨガが

週課に、着物大好き、神仏を大事

に、親孝行の娘に。熱心な先生方  
のお導きに感謝したいと思います。

◆一番の成果は、俳句を作れるよう  
になったことです。俳句歴六十二

年の夫の存在が大きく、とても感  
謝しています。

◆喜寿なるや汝れ甘柿か渋柿か

◆いつときの変身赤きアマリス  
(昭和五十二年卒)

## 記憶をたどって

鈴木 トミ江

三十八年間の教員生活を終えてから十年が過ぎました。現在は目の前の出来事に一喜一憂する平穏な日々を過ごしています。

「教師になりたい」と思ったのは中学二年の頃でした。高校は大学進学を念頭に置きつつ、ソフトボールと勉強の両立に悪戦苦闘の毎日でした。

幸いにも埼玉大学に入学でき、小学校教員養成課程で学ぶことができました。ところが、大学二年三年と断続的に入院することがあり、卒業に必要な単位が取得でき

るかどうかはらはらしていました。そんな中、一年生で受講した教

養学部(永野教授による「植生」の講義とフィールドワークが印象深く心に残っています。当時は樹木や植物の植生の奥深さに魅了さ

れ、図鑑や資料、地図を集め、時間があると空き地や道端、雑木林に目を懲らし歩き回りました。

四年生では地理学の福宿教授のもと、卒論に取り組みしました。地

域調査に魅力を感じ、課題、文献の事前調査、仮説設定、現地調査、分析と検証、結果のまとめと、完

成まで時間を要しましたが、実に面白かったです。聞き取り調査の生の声には、予想を超える新事実を突き付けられ、何度も悩まされ

ました。この時初めて「足を運び耳を傾ける大事さ」を痛感しました。無事卒業でき、ご指導賜った福宿教授に深く感謝しています。

教職に就いて幸運だったのは、一学年が四から六学級ある学校での勤務が多かったので、授業でも学級経営でも、力量のある、熱い志の先輩がたくさんいたことです。

学年会や授業研究会での忌憚のない意見や活発な協議、普段の厳しいが心配りのある指導など、年齢に関係なく切磋琢磨する姿は「学び続ける教師こそ教える資格がある」という私の目指す教師像の礎になりました。

「夢に出てくる程手のかかる子に、一ミリでも成長の兆しが見えると一気にそれまでの苦労を忘れ、また頑張れる」子供の成長の喜びは、私の原動力にもなりました。

管理職にあっても、学び合う教師集団に支えられ、市町を越えたネットワークで助言や支援を得ることができ、幾多の困難も乗り越えることができました。これまでに多くの出会いと、関係各位のご指導ご鞭撻に感謝しきりです。

今回記憶をたどり、私の授業研究や課題解決の源流が、大学での荒削りな調査研究にあったことに気付きました。植生の知識は趣味の園芸に生きています。自らを振り返る機会をいただき、役員の皆様

に感謝いたします。(昭和五十三年卒)

## 教育に携わって四十七年

伊藤 美由紀

大学で充実した時を過ごし、念願の小学校教員として仕事を始めてから四十七年が経過しようとしています。多くの人に支えられ、健康で勤め続けることができたことに感謝するとともに、振り返ると日本の教育の大きな変化の中に自分が居たことに気づきます。

変化としては、まず児童生徒数が挙げられます。就職当初は児童生徒が急増した時期で、各市町村で学校分離と開校が続きました。しかし、現在では、少子化が進み、閉校や学校の統合が相次いでいます。一学級の児童数も四十五人学級から三十五人学級となり、一人一人により目が届くようになりましたが、四十五人学級の中で遅く成長した子供たちの笑顔を懐かしく思い出します。

教員の仕事に目を向ければ、事務用品一つをとっても大きく変わりました。新任の時に配られたのは、ガリ版と鉄筆でした。指導案も子供や保護者への配付物も勿論手書きです。それが今は、教師にパソコンとタブレットが配付され、授業での様々な活用や教師同士がデータを共有したりネット上で会議ができたりするだけでなく、保護者との連絡までオンラインで可能となっています。道具が変化し

ただけでなく、「働き方改革」の名のもとに教員の働き方も大きく変わろうとしています。

日本の学校教育における半世紀近くの変化は語りつくせないほどありますが、変わらない大切なものもあります。それは、「子供たちの伸びゆく力を信じ、資質・能力の育成に努力を惜しまない教師の姿」と「懸命に伸びようとする子供たちの姿」です。私は一九七七年の「ゆとりある充実した学校生活」を目指した学習指導要領の改訂から現行学習指導要領まで、五回の改訂の中で仕事をしてきました。時代の変化を背景に未来を担う子供の教育の在り方も変化しましたが、いつの時代も、学校現場には変化を真摯に受け止め子供たちのために努力する教師の姿がありました。

「未来は先行き不透明」と言われる中で、今、学校では、「子供は有能な学び手である」という原点に立ち、ICT環境を効果的に活用しながら「教師が教え込む授業」から「子供が自立して学ぶ授業」への転換が図られています。若き教師が教材研究を深め、真剣な眼差しで主体的に学ぶ子供たちを温かく支え導いている姿を見ると頼もしさを感じます。これからも教育の最前線に立つ先生方にエールを送り続けたい気持ちでいっぱいです。

(昭和五十四年卒)

## 卓球と共に

竹田 聡

埼玉大の同級生や先輩後輩に会うと「卓球は？」とよく聞かれます。どうやら私は卓球ばかりしていたと思われているようです。

教員になろうと思ったのは、中学の卓球部顧問の先生との出会いでした。中学三年の一年間だけでしたが、その先生に憧れて、同じ高校、大学に進学しました。

埼玉大卓球部には軽い気持ちで入部したところ、三学年上に強い先輩がいました。強い理由は、シンプルの動きが速く正確だからです。その先輩に少しでも近づきたくて、速く動けるようにとひたすら動く練習をしました。平日は午後四時から九時まで、旧第二体育館で練習し、土曜日はランク戦がありました。時には、練習後に北浦和の焼き鳥屋「鳥高」で反省会もありました。入部して三、四か月もすると、成果が表れ勝ち始めました。中学、高校時代は全く勝てなかっただけに、嬉しくて一層練習に打ち込むようになりました。更に強くなりたくて、県内トップクラスの卓球クラブ「親球会」を、ある先輩に紹介していただき、高いレベルで練習をしました。そのお陰もあり、北関東五大学卓球大会の男子単で三年連続優勝もできました。

埼玉大卒業後は埼玉県中学校教員になり、卓球部顧問にもなりました。また「親球会」に教職員の方もいらしたので、県教職員チームに所属し、いろいろな大会にも出ました。選手としては二十代で区切りを付けましたが、今でも全国教職員卓球大会は毎年参加しています。コロナ禍の中断のため、三年後に四十年連続表彰の予定です。卓球を続けていると幸運な出会いがあるもので、埼玉県教職員チームに、全日本卓球選手権で八回優勝した斎藤清さんが入られました。雲の上の存在だった方から「竹田さん」と呼ばれるとは、大学時代には考えられなかったことです。ちなみに、斎藤清さんが、全日本卓球選手権通算百勝を達成された際に、新聞各社が前人未踏の偉業を報じた記事をプリントしたマグカップを贈りました。とても喜ばれて、よい恩返しとなりました。

(昭和六十二年卒)



## つながりを力に

高野 達

埼玉大学在学中、最も力を注いだのは、学業ではなく硬式野球部での活動でした。今となつては反省点ですが、附属中学校での教育実習には、必死に取り組んだ思い出があります。

参考にしたこともあります。附属中学校には十二支が一巡するほど勤めましたが、教員として特に成長できたと感じたのは、大学時代から顔見知りだった同級生五人と一緒に勤務した経験があったからだと思います。

配属されたクラスの担任が国語科だったため、生徒が行っていた三分間スピーチを実習生も行うことになりました。私は、自分の中学時代の話をしました。担任の先生からは、生徒の視点に立ち、準備と時間を大切にすることを学びました。また、社会科の先生の指導のもと、地理的分野で朝鮮半島を扱う研究授業を行いました。教えるにはその十倍の知識が必要であること、授業に必要な資料を見極めた上で指導案を作成することの重要性を学びました。教育実習を通して、担任や社会科の先生方のように教師としての信念を明確にもち、生徒から信頼される教師になりたいと強く感じました。

卒業後、中学校教員として二校を経験したのち、縁あって附属中学校に勤務しました。教育実習の際に目標としていたお二人と、再び一緒に働く機会に恵まれたのです。自分が教育実習生を指導する立場となると、お二人をお手本とするため、当時の記録を読み返し

同じ学年を担当することも多く、四クラスのうち三クラスの担任が同級生という年度もありました。中学三年の担任になると、年度後半は進路指導室にこもって進路業務に取り組み日々でしたが、悩みを共有し、支え合いながら進めることができました。附中祭などの学校行事では、生徒たちを巻き込みながら「同級生のあのクラスには絶対に負けないぞ」と互いに切磋琢磨しました。教員として最も充実していた三十代を、同級生たちとともに過ごせたことを心から感謝しています。

その同級生たちは、今では校長として県内各地区で活躍しています。学校経営などで悩みがあるときには連絡を取り合い、相談することもしばしばあり、アイデアや元気をもらっています。

埼玉大学や附属中学校で得た「つながり」のおかげで、ここまです仕事を続けることができています。これからも埼玉大学や附属学校で学んだ方々が、県内の教育現場で活躍していくことを心から願っています。

(平成三年卒)

## 人とのつながり

水落 美佳子

私のささやかな自負は「人に恵まれてきた」ということに尽きます。大学時代はもちろんのこと、教員として歩みを進める中で、折に触れてそのありがたさを深く実感してきました。大学時代に共に学び、志を語り合った先輩後輩や友人たち、そして教育現場や行政で出会った多くの方々とのつながりは、私の教育に対する姿勢や価値観を形づくる大切な基盤となっています。思い返すほどに、「人とのつながり」という言葉の確かさを強く感じます。

今年度は多くの学校を訪問させていただき、校長先生方と直接お話をする機会に恵まれました。教員の資質向上、組織としての連携の強化、保護者や地域、行政との信頼関係の構築、さらには新たな課題への対応等々、学校が抱える課題は多岐にわたります。様々な不安を抱えながらも、それでも現有的資源を最大限に生かし、最適解を探り続ける校長先生方の姿に、学校は「人によってつくられる場所」であることを改めて確認しています。

現在、子供たちを取り巻く教育環境は大きな転換期を迎え、学校現場には新たな対応が求められています。しかし環境がどれほど変

化しても、その中心にあるのは人とのつながりであり、「人の力」だと思っています。

教職に携わるほど、「この仕事には大きな力がある」と実感します。子供たちの成長を間近で感じられる瞬間、悩みながらも前向きに挑戦を続ける先生方と一緒に考え、支え合う時間・そのすべてが教職ならではの醍醐味であり、私の原動力となっています。だからこそ、次の世代にもぜひ教職に挑戦してほしいと思っています。大変さはありますが、それ以上に「人の成長に関わる」という何ものにも代えがたい喜びと手応えがあります。未来をつくる仕事に携わる仲間が、一人でも多く増えてほしいと願っています。

近年、大学時代の同期と再び語り合う機会が増えました。思い出話に花を咲かせ、それぞれの歩みや課題を共有する時間は、自分自身を振り返り、視点を新たにすると貴重な場です。また、旅行などを中心をリフレッシュしながら見識を広げ、自分自身の軸を整える時間も大切だと感じています。こうしたつながりや経験から得た学びを糧に、これからも変化する教育の現場に誠実に向き合い、子供たち、教職員、そして学校全体の成長に寄与できるよう努めてまいります。

(平成五年卒)

## 私の軸と輪郭

坂井 貴文

小さい頃から自由帳やチャシの裏側に怪物の絵を描くのが好きでしたが、自分の怪物の絵の図鑑をつくるという目標を持ち始めたのが大学時代でした。それは大学時代特有の有りあまる時間がその目標を形作ったのだと思います。

大学時代には本を手取る習慣も生まれました。大学の講義やゼミなどに触れることで、活字の世界にのめり込む時間が日常に入り込んできたように思います。単に知識を得るためではなく、思考と想像を広げ深めるために読むことを覚え始めたように思います。

高校から始めた柔道を続けるために柔道部に二年間所属しました。志を高くもつ多くの柔道家から、柔道の奥深さに触れることができました。自分には真似したくても真似できないことがあるということとを痛感したことを覚えています。家庭の経済状況等の理由もあり、柔道部を辞めることにしました。その後も「来られる時は稽古に来いよ」と声をかけてくれた先輩や仲間の温かさは今も覚えています。柔道部を辞めた後、家庭教師と塾の講師のアルバイトを始めました。そんな時期に友達からむつめ祭でダンスをやらなかと誘われました。大学の新生歓迎会で新

入生に楽しんでもらうためにダンスをした経験があったのでやることにしました。それをきっかけにミュージカルサークルをつくるという話になり、その流れでサークルに入りました。やったことのないことでも、流れに身を委ねて、ミュージカルを仲間とつくる経験から、一人一人のよさを合わせて一つのものをつくりだすことの価値や楽しさを味わうことができました。

大学時代は「私の軸をつくり、私の輪郭を形づくることに今も影響を与え続けるもの」であると感じています。

卒業後、埼玉県の小学校教員になりました。川口市での教員を経て、埼玉大学教育学部附属小学校の図工担当の教員になりました。特に、子供は豊かな存在であること、子供と共に教師は学び続けるものであること、図工は自分をつくる教科であることを学びました。私は現在、埼玉県教育局南部教育事務所指導主事をしています。市町教育委員会、学校と一体となり、学校の力になることを目指しています。

大学時代から今までを振り返ることで、「創造と教育の、個と社会の交差点に立ち続けること」が「私の軸と輪郭」であることに思いを馳せることができました。

(平成二十年卒)

## 教員としての三年間と特別支援教育の学び

梅田 大志

私は現在、初任の小学校で特別支援学級の担任として三年目の教員生活を送っています。

私が特別支援教育に関心をもった原点は、大学時代の教育実習にあります。当時はコロナ禍で、実習期間は三週間と短く、三年生、三十九人の学級で実習を経験しました。学級の中では、個性が様々で、周囲の友達の様子を見て動く子、個別の声かけ等の支援を要する子がいることを知り、そのような子供たちに支援をしたいという思いを抱いたことがきっかけです。個別最適な支援が環境の調整や情報の伝え方によって成立していく様子を目の当たりにし、この経験は、専門性の重要性として、現在も私の心に強く刻まれています。

大学生から社会人になり、大学での机上の講義から一変し、実際に目の前の子供と関わっていく中で、初めは机上での学びと実際の子供に応じた対応の方法の違いに戸惑いがありました。大学で学んだ障害の特性にとらわれ、子供を叱れずに甘やかしてしまったこと、反対に、条件を厳しくしすぎてしまったことなどがありました。

その結果、私自身の軸がぶれ、子供が困る姿を目にすることもありました。あそこで叱ればよかったのでは、あのように伝えていれ

ば子供にとって分かりやすかったのではなど対応や声掛けを模索していました。

その過程で気づいたのは、子供は将来どのような形であれ自立するために、今は人に頼る方法や自分で気持ちの折り合いをつける力を学んでいるということです。そこから、子供を第一に考え、「何のためにこの学習をするのか」「そのためにはどのように支援すべきか」を意識することが大切であり、軸をぶれさせないことが子供にとって最も良い支援につながると考えるようになりました。

私が軸としているのは、「子供の目線に立つて捉える」ことです。急に次の行動を指示するのではなく、見通しをもてるように情報を先出しすることに加えて、あらかじめ複数の選択肢を提示することで、子供自身が同意の上で選べるようにしています。また、自己決定した行動がたとえうまくいかなかった場合でも、事前に「こういう動きになるよ」と情報を伝え、別の見通しをもたせておくことで、成功も失敗も安心して経験できるよう日々関わっています。

教員を目指している皆さん、困ったときは立ち止まり、様々な場面を想定しながら一つずつじっくりと試してみるのも良いかもしれません。皆さんと一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

(令和五年卒)